

クリスマスのページェントで  
日曜学校の上級生たちは  
三人の博士や  
牧羊者の群や  
マリヤなど  
それぞれ人の眼につく役を  
ふりあてられたが、  
一人の少女は  
誰も見ていない舞台の背後にかくれて  
星を動かす役があたった。  
「お母さん、  
私は今夜星を動かすの。  
見ている頂戴ねー」  
その夜、堂に満ちた会衆は  
ベツレヘムの星を動かしたものが  
誰であるか気づかなかつたけれど、  
彼女の母だけは知っていた。  
そこに少女の喜びがあった。

(「星を動かす少女」松田明三郎)

この女の子は、どんな気持ちでお星様の役を引き受けたのでしょうか。もしかすると、きれいな衣装を着て、台詞のある役をしたかった、と思ったかもしれませんが、もちろん、おとなしい子で、目立つ役よりも表に出ない役の方がいい、という子だったかもしれませんが。しかしどちらにしても、この女の子を支えていたのは「自分の役割を、ひとりだけでも知ってくれている人がいる。しかもそれは、とっても大好きなお母さんだ」ということです。誰か一人でも、自分のことをわかってくれている人がいる。それが、かのじよにとってはとても嬉しいことだったのです。

あのクリスマスの夜、不思議な星がベツレヘムに輝いて、東の博士たちや羊飼

いたちの道しるべになりました。けれども、その星があらわれたのなら、どうしてベツレヘムにいる他の人たちは気づかなかつたのでしょうか。もしかすると、ベツレヘムの星というのは、ぎらぎら輝く星ではなくて、ひっそりとして目立たない、かすかに輝く星だったのかもしれない。

毎晩、星を見上げていた博士たちだったから。町から遠く離れた野原で、毎晩羊を守りつつ、夜空を見上げていた羊飼いたちだったから。だからこそ、何もないうところに急に現れたメッセージを、すぐに受け取ることができたのかもしれませんが。なかなかすぐには成果の出ない天文の観測を、それでも毎晩つづけていた。あまり人に好まれない羊飼いと仕事、それでも毎日毎晩続けていた。何もないうところに(おそらく)ひっそりとあらわれた星空のメッセージは、その人たちにいちばん最初に届けられました。そこにこめられていたのは「わたしは、あなたを覚えているよ。誰も見てくれないように思えても、あなたがいるところを、あなたの働きを、わたしはいつも見守っているよ」という、優しいやさしい神さまの親心です。

今年もようやく、クリスマスです。しんどかったなあ。今年も毎日、生きるのが精いっぱいだったなあ。みんな浮かれてるけど、自分にはクリスマスなんて関係ないよ。いえ、ほんとうのクリスマスは、そんなあなたのためにあります。ベツレヘムの星の光は、そんなあなたにこそ届けられた、天からの優しいメッセージです。

Aki

# 星を動かす少女

今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。  
あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである

ルカによる福音書 2 章 10 ~ 11 節 (日本聖書協会・新共同訳)



Photo:scx/christian sherratt



大人を育てる  
絵本からのメッセージ  
Kew



サンタクロースって いるんでしょうか?  
フランス＝P＝チャーチ著 中村 妙子訳  
東 逸子画 / 偕成社

絵本という小さなご道具のための本というイメージがあります。大人にとっても生きるヒントになる本がたくさんあります。ここでは子育てという視点でお話をしていますが、あらゆる人間関係においてもお役立ていただけることと思います。

「サンタクロースって いるんでしょうか?」

もう100年以上も前に、アメリカのある新聞社に8歳の少女からこんなお手紙が届きました。この絵本は、そのお返事として、「そうです。サンタクロースはいるのです」と一人の新聞記者が社説の中で彼女の疑問に答え、大きな反響を呼んだという実話に基づいて書かれています。わたしには、中学3年生の娘と中学1年生の息子、そして小学校5年生の娘がいます。子どもたちは今もサンタクロースの存在を信じています。イブの夜、娘ふたりは寒い中みんなにプレゼントを運ぶサンタさんのために

にプレゼントとおやつ、そしてサンタさんへのお手紙を添えてテーブルの上を用意しています。お金を持っていない彼女たちが、毎年あれこれ知恵をこぼしてサンタさんへの手作りのプレゼントを用意している姿には、胸がジーンときてしまいます。

サンタクロースからのプレゼント

我が家では、クリスマスまでに祖母や叔父叔母友人からのプレゼントが届くと、必ずソリーの下に置いておきます。そして、クリスマス朝、いつもよりうんと早起きをした子どもたちは、いつせいに自分宛のプレゼントを開け始めます。その中に、前日まではなかったサンタクロースからのプレゼントを見つけたら、喜びの悲鳴をあげるのです。わたしは、子どもたちが知っているような赤い服を着たサンタクロースを見たことはありません。でも、確かにサンタクロースは存在するのだと信じています。

イエス様も

「大事なものは目に見えない」絵本の中で新聞記者はそう言っています。「目には見えないけれど確かにあり、そして人を豊かにしてくれるもの」が存在することをうまく伝えられない時、自分自身が迷ったときに、この本は心をあたたく包んでくれる一冊です。メリークリスマス!! すてきなクリスマス!!

聖書物語 He Qi Arts  
ハイチアーツ



Knocking at the Door  
by He Qi, www.heqiarts.com

戸をたたく主

見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしを聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。

ヨハネの黙示録 3章20節

いのちを語る。

サンタ募集中! (ヨハネ15章12節)

「ヨハネ、そなたが初めまして。ばく、小太郎です。いつもここで母ちゃんがお世話になってます。読み苦しいかもしれないが、今日は風邪ひき母ちゃんの代わりに、ばくがお手紙を記したいと思います。今年もあつと言つ間の12月、皆さんクリスマスのご予定はごうですか? ばくは整肢園でお友だちと一緒にケーキを食べて、プレゼントをもらつて予定になってます。」

整肢園に来るサンタちゃん、真っ赤な衣装に白のおひげ姿ですが、皆さんの所も同じ人が来ますか? ばく、よくたつた一人の世界中を一日で回れるなーと常々不思議だったので、ある日見かけた、たけしさんの番組でこの謎が解けた気がしました。

ちよつと前の「よ、アメリカというお国」、ラリー・スチュワートさんというお爺ちゃんがおりました。大富豪のラリーちゃんも若かりし頃、お金も仕事もなくなつて、無銭飲食をしてしまったことがあるんです。でも、そんな彼を哀れに思ったお店のソックちゃん、自分のお財布から出たお金をわざと落とちて、そつと「あなたではないですか?」と手渡したそつとさんですね。その瞬間はただ「ラッキー☆」と思つたラリーちゃんも、そのソックちゃんの厚意に程なく気づきました。一時は銀行強盗まで考えた自分を生き返らせてくれた「恩が忘れられず、クリスマス前貧しい人たちに突然お金を手渡し出たのでした。素性を全く明かさずに。やがてガンで余命幾ばくもないことを知つたラリーちゃんは名前を公表、後進サンタさんで大募集しました。資格は不問、地位も名誉も不要。仕事内容は夢と希望を配達するべく、現在たくさんのお後輩サンタがこつと世界で大活躍しているのです。」

